

評価と指導の一本化を目指して(統合評価法の活用)

三重県安芸郡河芸町立豊津小学校

しまだ ひろし
嶋田 浩

【実践の内容】

この実践は、統合評価法（三重大学教育学部付属教育実践総合センター教授 下村勉先生が自己評価を重視して開発された評価方法）を活用し、評価と指導の一本化を目指した6年生の分数のわり算の実践である。

統合評価法を毎時間活用していくことで、子どもたちは、慎重に計算したり、見直しをしっかりとるようになった。そして、指導者も子どものつまずきがはっきりし、個別指導がやりやすくなった。

その結果、全体で正答率が上がり、子どもたちの取り組みも意欲的になっていった。

【論文内容の紹介】

1 主題設定の理由

私たちは、子どもたちに確かな学力が定着するように日々授業実践を行っているが、毎時間の評価が十分生かされないことが多い。

そこで、評価と指導が一体となった評価方法(統合評価法)を実践しながらその有効性を明らかにしたいと考えた。

2 統合評価法と期待される有効性

統合評価法とは、テストの問題を解決していくとき、答えに自信があるかないかを自己評価しながら答えていくようにするテスト(統合評価テスト)から得られた情報を分析しながら、今後の子どもたちへの指導に生かしていこうというものである。

具体的には、答えの横に解答に自信があればA、自信がなければBと記入しながら問題を解くようにする。

自己評価で得られる自信度データ(自信あ

りAと自信なしB)と、正答かどうかを客観評価して得られる正誤データ(正答か誤答)を統合すれば、表1のような4種類の自信度に分類することができる。

	自信あり (A)	自信なし (B)
正答	R 1	R 2
誤答	R 3	R 4

●表1/統合評価の分類

毎時間の学習内容が理解されているかどうかを統合評価テスト(3題～5題)を行いながら分析していくことで、学習成果の有無、個別指導の必要性、学習に対する自信度等がはっきり分かる。さらに、個人の特徴が分かり、今後の指導に生かしやすい。そして、まとめの問題を毎時間の統合評価テストと同様に統合評価することで、学習してきた単元で、子どもがどう推移したか見ながら、総合的に指導していくことも可能である。

3 実際の授業と考察

統合評価を活用した6年生「分数のわり算」の事例で考察した。

毎時間、統合評価を行っていくことで、子どもたちが問題に対して慎重に取り組むようになったし、R1を増やしたいという意欲を持って取り組むようになった。また、正答率もまとめの問題の方が5%上がった。指導者もつまずきに対する対応が的確にできるようになり、次の学習にも役立てることができた。

4 成果と課題

統合評価法を分数のわり算に取り入れていくことで、算数の学習を好きになり意欲的に取り組める子どもも増えてきた。指導者側からも、指導に役立てることができた。

今後は、統合評価法が有効に働く単元を増やしたり、インターネット上で瞬時に評価が可能なシステムを構築したりすることが課題となるであろう。今後も実践を重ねながら、評価の改善方法を明らかにしていきたい。